

薄型ルシェロで口腔内を変える “処方”のアプローチ

塩浦有紀 Yuki SHIOURA
東京都・熊谷歯科医院 歯科衛生士

いつもの歯ブラシ、実はここまで変わっています

ジーシーのルシェロシリーズは、これまでも多くの歯科医院で使われてきた歯ブラシです。臨床では、みなさんもとくに意識せず自然に手に取っている、そんな存在だと思います。

そのルシェロシリーズのヘッドが薄型化されたと聞いたとき、実をいうと、「そんなに違うのかな？」と最初は少し半信半疑でした。しかし、見た目はほんの少しの違いですが、実際に使ってみると、その差は想像以上でした(図1)。

歯ブラシのヘッド形状は、各メーカーでも改良が重ねられてきましたし、わずかな厚みの違いで使用感が大きく変わるのかどうかは、実際に使ってみなければわからないと思いました。しかし、自分自身で使用し、患者さんにも使ってもらなかで、その印象は少しずつ変わっていききました(図

2、3)。薄型になったヘッドは、口腔内に入れた瞬間の感覚が従来型とは異なり、とくに臼歯での動かしやすさを感じる場面が増えました。

正直なところ、「ここまで違いが出るとは思っていなかった!」というよりも、「これはちょっと楽かも?」と覚えることが、少しずつ増え続けたという感覚に近いかもしれません。

「使いやすい」という一言の裏側

薄型ルシェロシリーズを使用した患者さんからは、下記のような共通した感想をいただきました。

- 「奥まで入れやすい」
 - 「前よりも、当てたいところに当てやすい」
 - 「口を大きく開けなくても磨ける」
 - 興味深かったのは、「難しい」、「当てにくい」といった感想が出てこなかったことです(図4)。
- ブラッシング指導では、「正しく当てる」、「細

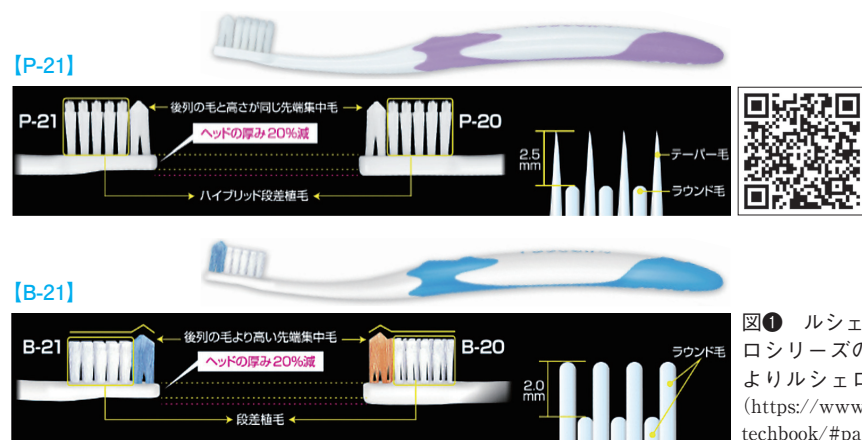


図1 ルシェロ従来型と薄型の比較。ルシェロシリーズの詳細については、QRコードよりルシェロテクノロジーブックを参照(<https://www.gcdental.co.jp/product/ruscello-techbook/#page=1>)

【Case 1】 従来型 P-20M と薄型ヘッド P-21M の使用比較

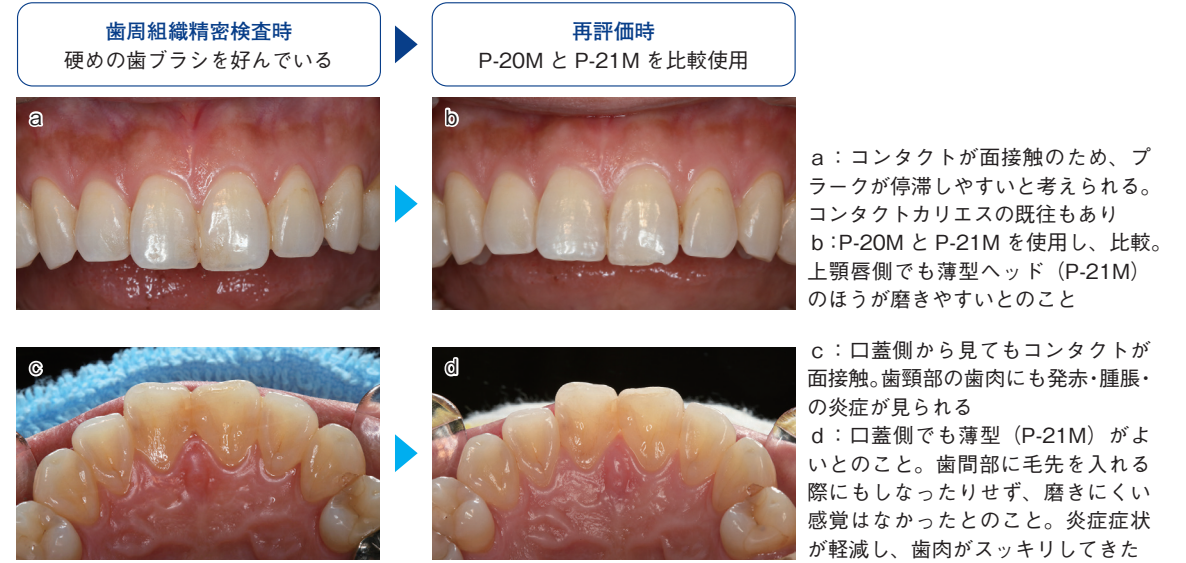


図2 44歳、女性。上顎前歯唇側(a、b)および口蓋側(c、d)。養生もほぼなく、磨きやすい歯列かと思われる。従来のP-20Mと薄型ヘッドのP-21Mについて使用感を比較してもらった



図3 3週間使用した歯ブラシの使用前後比較。P-21Mは薄型になったことで、口唇や頬粘膜の圧で押されることが少なくなったと考えられ、歯間にスムーズに挿入できたことで、毛先の開きに差が出たと考えられる

かく動かす」といった説明をする以前に、物理的な操作のしにくさが壁になることがあります。ヘッドが厚い、奥まで入れにくい、頬や舌が邪魔になる……。そういった要因が重なると、患者さんには「うまくできない」という感覚が残ります。結果としてブラッシングの難易度を上げてしまいます。患者さんが「使いやすい」と感じる背景には、単なる好みや慣れだけではなく、身体的な負担の少なさや、動作の再現しやすさといった要素が含まれるのだと実感しました。

薄型になったルシェロシリーズでは、そうした“最初のつまずき”が少ないように感じました。歯ブラシを口腔内に入れた瞬間に「あ、入る」、「動

かせそう」と感じられ、その感覚が、その後の動きや意識に影響しているように思います。

操作しにくい口腔内の患者さんへの提案で感じたこと

臨床では、口腔内の状況により歯ブラシ操作が難しいと感じる患者さんも少なくありません。口腔前庭が狭い患者さんや歯科矯正中の患者さんでは、歯ブラシを入れるだけではうまく口唇を排除できなかったり、歯科矯正装置が邪魔になったりして、「当てにくい」、「当たっているのか、わからない」と言われることがあります。このような患者さんに薄型ルシェロシリーズを提案すると、「前より入れやすいですね」

【 Case 2 】 叢生部や補綴装置周辺の清掃

歯周組織検査時 (2025年6月)
毛先が細く少し硬めの歯ブラシ使用

再評価時 (2025年12月)
ルシェロ P-20M → P-10M を使用

a : 力を入れて磨くのが好みとのことだが、歯間部の歯肉の出血や発赤・腫脹の炎症症状が見られた
b : P-20M を試すも大きさか硬さか使用感に満足せず、P-10M を使うと「とてもよい」との評価。歯間部に見られた出血や炎症が軽減・消失した

c : 磨きにくい部位であるためブラークを確認でき、歯間部歯肉の出血や発赤・腫脹の炎症が見られた
d : 叢生部は歯ブラシを縦にしたり、斜めにしたりし、歯間部に毛先を入れながら磨いてもらったところ、歯間部の出血や炎症症状が軽減・消失した

e : 右利きの方にとって右側口蓋側は磨きにくい。30年ほど前に仮止めにした5.4のクラウンが外れなくなってノブがそのままになっており、歯肉からの発赤・腫脹の炎症症状が見られた
f : P-10M でうまくノブ周辺の歯肉にも毛先が当たるようになり、出血や炎症が軽減・消失した

g : 右利きの方にとって左側口蓋側は比較的磨きやすいと考えられるが、不適なクラウンの周囲に歯肉からの出血や発赤・腫脹の炎症が見られた
h : P-10M を使用し、クラウンも外したため出血や炎症症状が軽減・消失した

図4 56歳、女性。歯周組織検査時 (2025年6月 : a、c、e、g) と再評価時 (2025年12月 : b、d、f、h) の比較。再評価時には引き締まった歯肉に回復しているのがわかる

「前歯を磨くとき、邪魔になりにくいです」
「ワイヤーの周りに入れやすい」といった声が聞かれました。ヘッドの厚みが抑えられていることで、歯ブラシを口腔内に入れる際の抵抗感が少なくなり、無理に頬を押し広げたり、装置を避けながらブラッシングする場面が減った印象です。口唇と歯列との感覚も掴みやすく、歯ブラシの当たり方をイメージしやすいように感じました (図5~7)。
口腔前庭が浅い患者さんや歯科矯正装置を装着

中の患者さんにとって、歯ブラシが「入る」、「動かせる」という感覚そのものが、セルフケアのハードルを下げる大きな要素になります。患者さんの「やりづらさ」が少し減るだけでも、ブラッシングへの心理的な負担は大きく変わってくると、改めて感じました。

■ 患者さんの行動に見えた小さな変化

興味深かったのは、薄型ルシェロシリーズを使用した患者さんの行動です。最後白歯に届きやす

【 Case 3 】 矯正中の口腔内における清掃性

P-20M を使用

P-21M を使用

図5 37歳、女性。下顎前歯のブラケット周囲の歯肉が増殖しており、薄型ヘッド (P-21M) はかなり入りやすかった様子。口腔前庭が浅いわけではないが、P-21M のほうが矯正用ワイヤーと歯の間に歯ブラシが入りやすかったとのこと

【 Case 4 】 矯正用ワイヤーの下から毛先が入る

図6 薄型ヘッド (P-21M) のほうが矯正用ワイヤーの下からすんなり毛先が入り、ブラケット周囲に十分届いているのがわかる

a : P-21M b : P-20M
図7 ヘッドの薄さによって毛先の濡れ方が異なるのがわかる

【Case 5】 ブラークが歯面に張り付きやすい患者さん

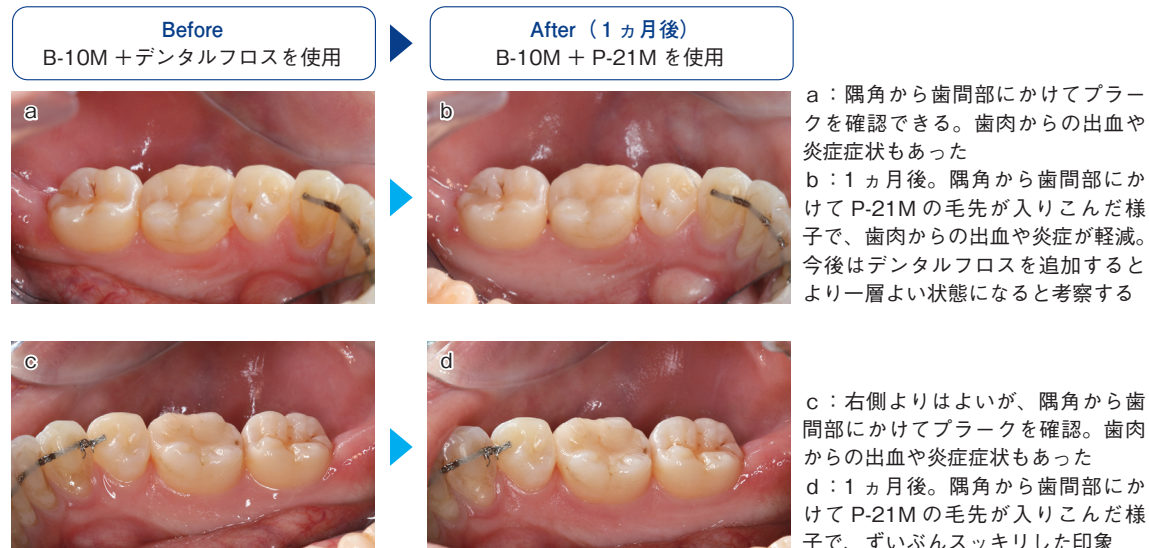


図8 35歳、女性。下顎右側臼歯部舌側 (a、b) および下顎左側臼歯部舌側 (c、d)。ブラークが歯面にべったりと張り付きやすい。歯ブラシの種類による清掃性の違いを1ヵ月後に比較してもらった

くなったり、舌側で動かしやすくなることで、「できない」より先に「やってみよう」という気持ちが出てくるように感じられます (図8)。

セルフケア指導では、完璧な操作を求めることよりも、患者さん自身が「これならできそう」と思えるかどうか重要です。歯ブラシの形状が、その感覚を後押しすることがあると実感しました。

■ 歯科衛生士から見た操作性と説明のしやすさ

歯科衛生士として自身で使用した際にも、いくつかの変化を感じました。とくに、最後臼歯遠心部への誘導がしやすくなった点です。

また、歯科衛生士が「この角度で」、「この方向に」と説明する際、患者さんがその動きを再現しやすいと感じます。

■ 「届く」よりも「動かしやすい」

歯ブラシの評価では、「奥まで届く」という表現がよく使われます。ただ、実際の臨床では、届くだけでは不十分で、その位置で安定して動か

るかどうかが重要になります。

薄型ルシェロシリーズは、「奥まで届く」というよりも、「その位置で動かしやすい」という印象のほうが強いと感じました。ヘッドの厚みが抑えられていることで、固定装置や軟組織との余計な干渉が減り、意図した動きを再現しやすくなっているように感じます。

この“コントロール感”は、歯科衛生士の指導においても重要な要素です。患者さんが「言われたとおりに動かせた」という成功体験を得られることで、セルフケアへの意識が前向きに変わると思います (図9)。

■ 設計意図が伝わる薄型化

従来のルシェロシリーズも、決して使いにくい歯ブラシではありませんでした。しかし、ヘッドの厚みのわずかな変化で、口腔内での操作のしやすさがかなり変わるものだと、改めて感じさせられました。

また、今回の薄型化は、単なる形状変更という

【Case 6】 臼歯部歯頸部におけるP-21Mの清掃性



図9 63歳、女性。下顎臼歯部の歯周組織検査時 (2024年12月: a、d)、再評価1 (2025年3月: b、e)、再評価2 (2025年8月: c、f) の比較

d: 右側同様、ブラッシングはしていたが、意識して行っていなかった。しかし、右利きのため右側臼歯部よりも少し炎症症状は軽かった。e: 右側よりも炎症症状が軽減したが、P-20MとP-21Mに変更して試してもらった。f: 本人はそれほど差を感じなかったようだが、P-21Mのほうが奥まで届きやすそうで、歯肉の炎症も軽減したように感じる

よりも、「実際にどう使われているか」というさまざまな口腔条件を想定したうえでの改良であることが、臨床をとおして伝わってきました。

従来の特長を活かしながら、使いやすさを一段階上げている点は、製品評価として非常に高いポイントになると思います。

■ 日常臨床のなかで使い続けるということ

歯ブラシは、一度使って終わりの道具ではありません。日々使い続けるものです。そのため、最初の印象だけではなく、「無理なく使い続けられるかどうか」という視点も重要になります。

薄型ルシェロシリーズは、使い始めた直後だけではなく、数日、数週間と使い続けるなかで、その扱いやすさが自然に馴染んでくる歯ブラシだと

感じています。患者さんが特別に意識せずとも手に取れることは、セルフケアの継続において大きな意味をもちます。

歯ブラシの形状は、患者さんのセルフケアの質や継続性に、確実に影響します。その影響は決して大きな変化として表れるわけではなく、日々の「磨きやすい」、「動かしやすい」という小さな感覚が積み重ねとして表れてきます。

薄型になったルシェロシリーズは、患者さんの「できる」を無理なく引き出し、歯科衛生士の指導を静かに支えてくれる歯ブラシだと感じます。

今後も臨床のなかで、「今日はこれが合いそうだな」と思う患者さんには、提案していきたい一本になりそうです。